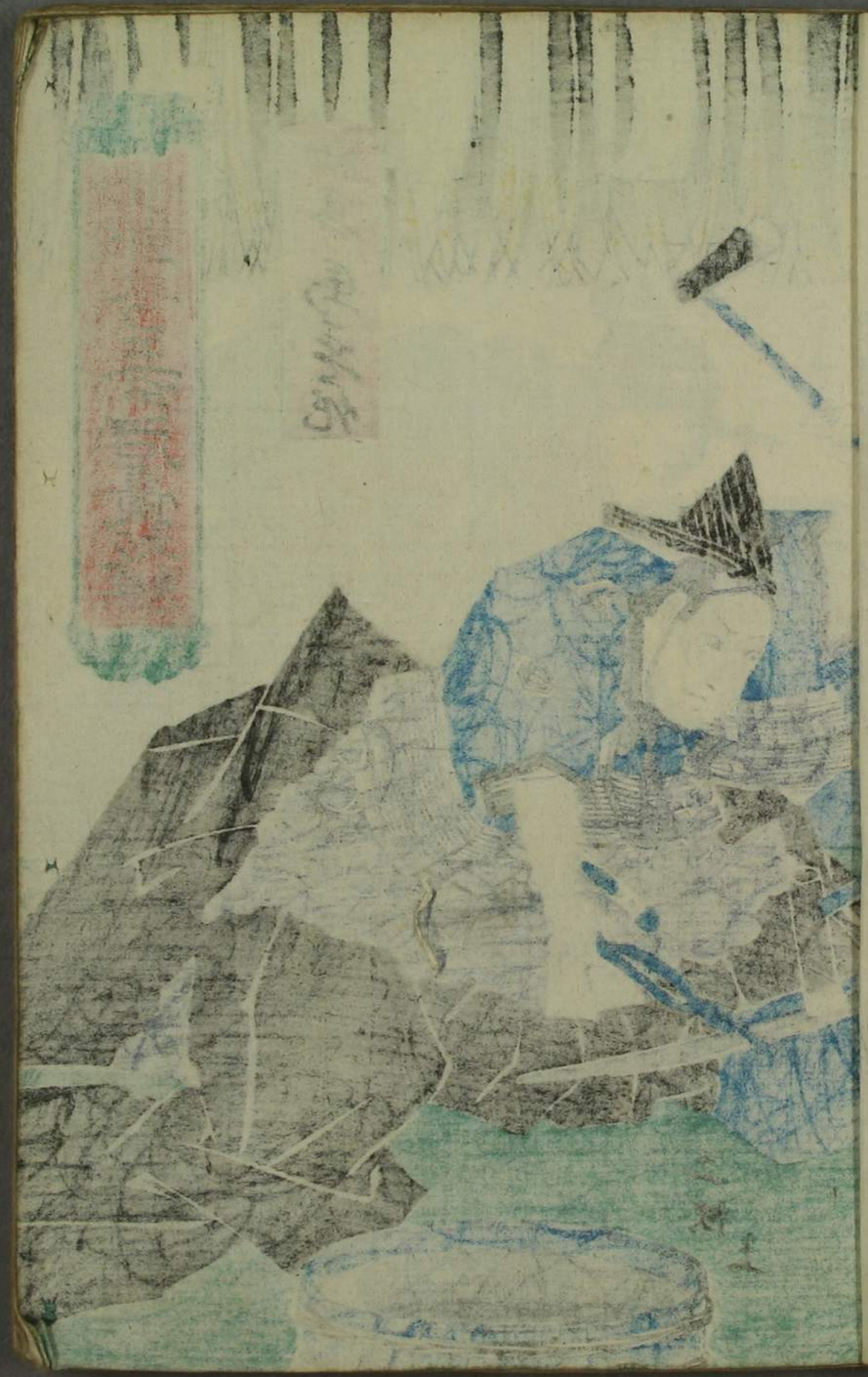
へ13
3089
1

在昔楚國に干將といふ鍛冶あり。其妻を嫫耶といふ。時に楚王の妃彼身肥ゆ故に。
夏日の暑に堪ず。日夜鐵の柱を抱いて。快と思ふ程に。遂に孕て鍊丸を吉楚王
其鐵をもて。干將嫫耶に。劍二口を作らしむ。その陰陽の二劍を干將嫫耶と名つけ
たり。干將その一劍を楚王に献せて。殘る一劍を秘して出さず。王是を知ッて。怒て干將
嫫耶を殺しぬ。干將の子の名を赤といふ。眉間の廣サ一尺ありけれバ。時の人綽號して。
眉間尺と喚做したり。王亦是を知ッて。赤を殺さまく欲す。事甚急。赤彼劍を抱いて。
逃て山中に在り。親の仇を報ぐ。其を悲ミて。且歌ひ且泣ぬ。其時客あり。赤に告て道。汝その劍
と。汝の首を吾に授ゑ。吾汝の為に楚王を殺して。怨を復んといふに。赤歎じてみづから刎
けり。然れどもその死骸倒れず。客則その死骸に向ひて。吾汝に叛らずとて誓ひしかば。
即倒まぬ。客その劍と赤が首を齎して。楚王に報て。実檢を請へり。王赤が首を
見るに。猶生るが如し。客亦王に薦めて是を煮さしむ。既に煮ること三日三夜にしてく。
その首爛れず。王訝りて。釜の蓋を開かせてみづから是を見まくする時。客その背に

へ13
3089
1-7
特
へ13
3089
1



女郎誉五色石亀初編

曲亭馬琴作

一陽宮曲亭画

丁未春

上帙下

上帙上

女郎花五色石臺

第二套

曲亭馬琴作

一陽富豊國画

丁未春新版

甘泉堂精刊

在り劍を拔て王を擊ば王の首金中に落て匝りて戰ふ者に似たり客是を見て赤みづから刎て二頭金中に匝りて煉亡ぬと云ふ言ハ瑯琊代醉篇に見えたり実ハ伍子胥の事に由て作設する當初の小説ゑまの土に所云眉間尺巴の紋の權輿ハ是ゑ搜神記巻の十二にも赤ぶことを載されども、そは畧文のミ然るを太平記大塔宮土の牢の段に右の全文を引用らせられば世の人今もをちく知るなり吾亦件の事をもて本編に撮合せて胎を奪ひ骨を換ておく一種の主稿とす又唐山の俗語小説五色石の書名を借て女郎花五色石臺と命るよしは章魚の櫻煮石決明の醋貝堅に處に柔とある細工ハ流々結局まで看ば諸君子作者の用意を知らんかは五六集續出すべき長物語の緒とけ曳初る春霞四方の長視とたのみてぞ代書の筆をかりそめながら童蒙心にるほまでに老似げるくも弱らしう序す。

弘化三年閏月下浣代書稿成
四年丁未正月吉日發行

曲亭馬琴識

鎌倉管領
足利
持氏

未のもしら酒をし
らま波女花乃
名れ美妃と
小町と右ひ
翠竹亭鈴風

湯上閔次
猛列

女時致
遲鷲

夕人
額荷九儀七

むしあつ雲乃
いきまつ吹けれて
月ふなりまく夜の笛
翠竹亭

我れ面よ
きらめく
大刀乃
魚
ゑら
覺の
蛍
ぬけ
婆
玉ちは
鈴風
三條の
後鍛冶
宗次
女房乙絺

窓おりふ
君ふあふ夜ハ
三味線の
いとしめやうし
しのび稱ぞ
まれ
翠竹亭
片名屋
般七
枯野の尾花

面影のかわらぐ年をふる雛を桐乃とて屋の山よしむらん

山道高彦舊詠

雛屋妙作

千曳の重石

誠あきハ
紛ら傳も
ちまれ一世を乃
ひくれ
頭ゝ
神ハ宿
アナヽ
九九老人
無疆

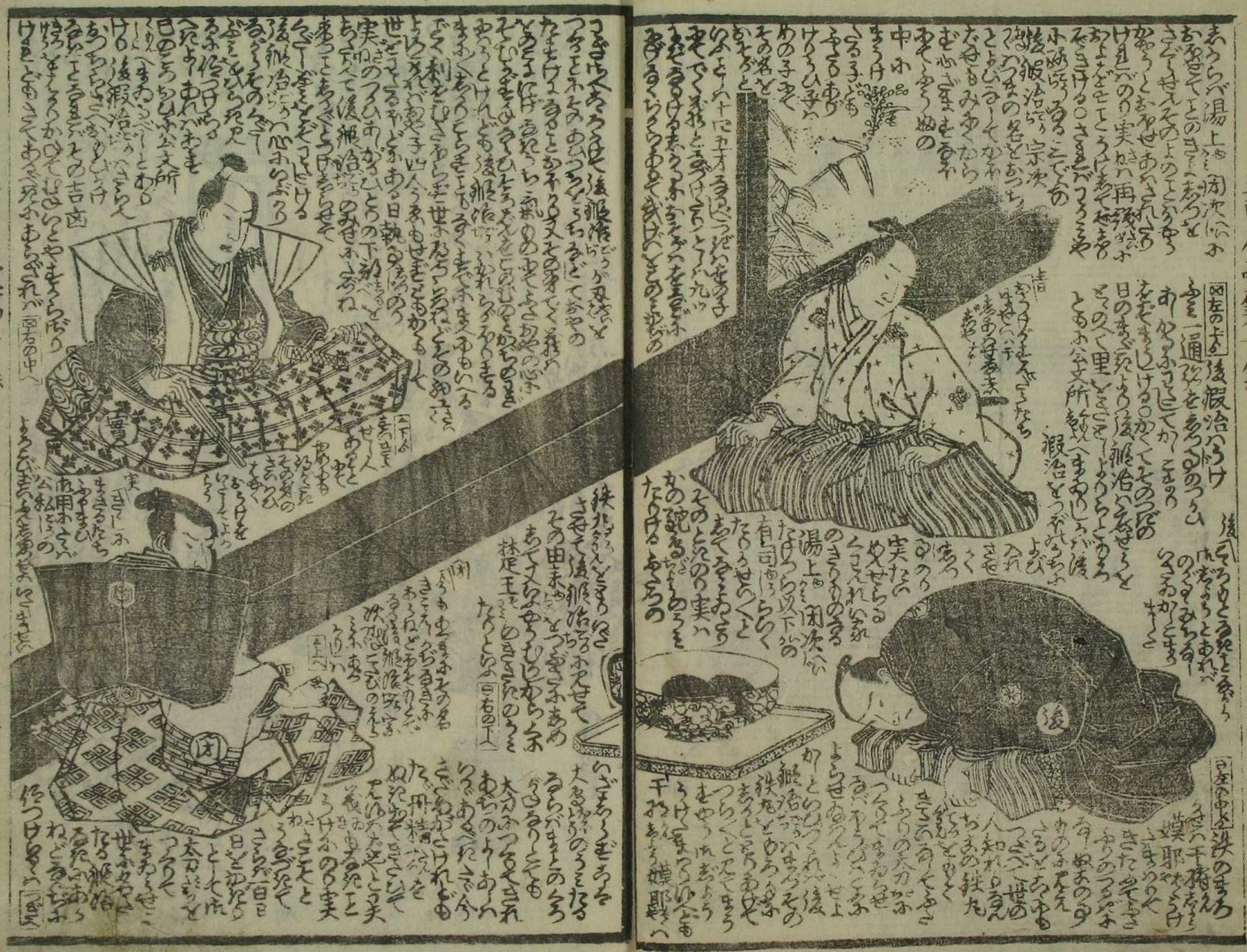
雛屋の忠僕
木偶藏

手嵐
无方太
重當

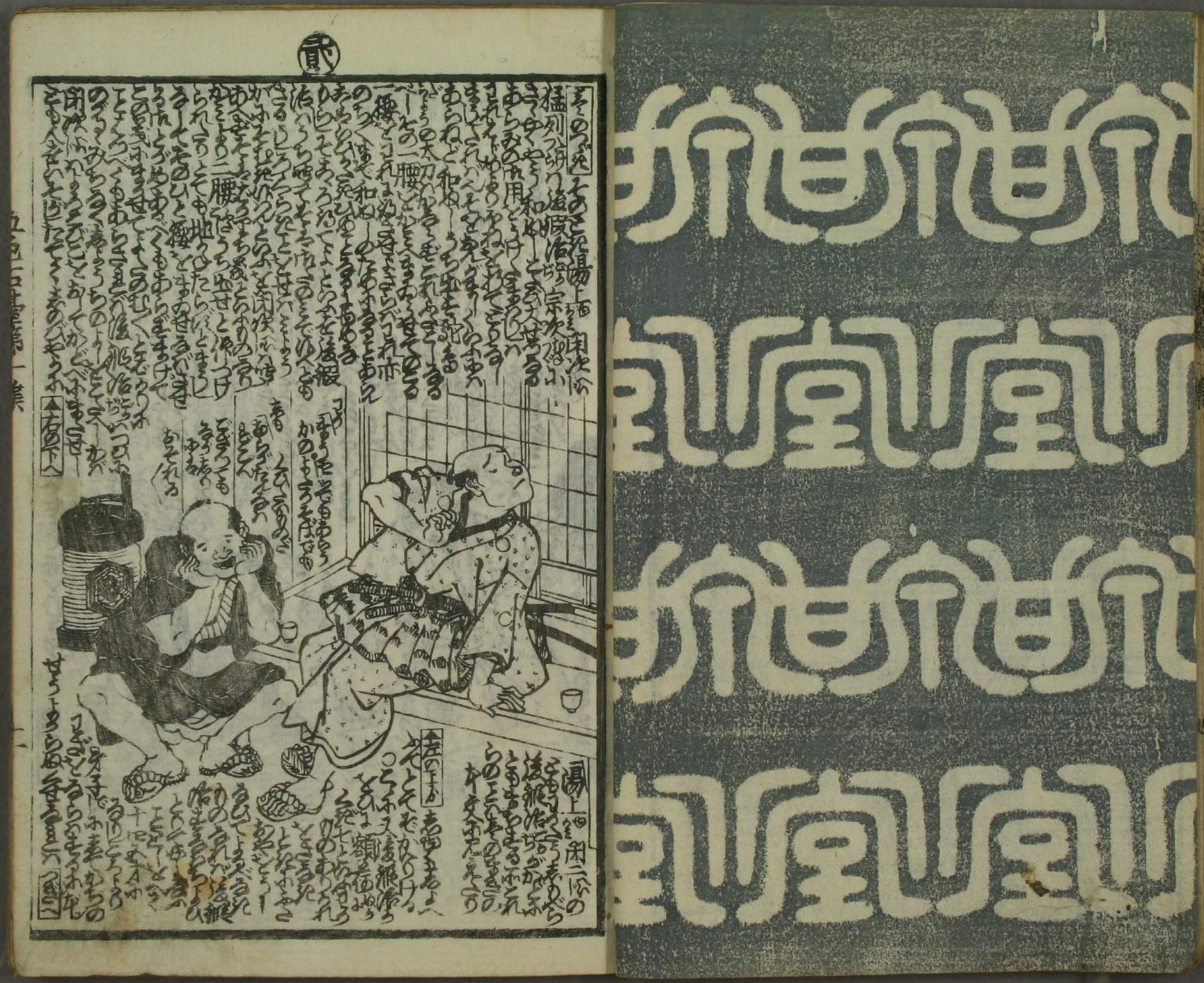
火の用心

五色塚

光明遍照十方世界
念佛衆生攝取不捨

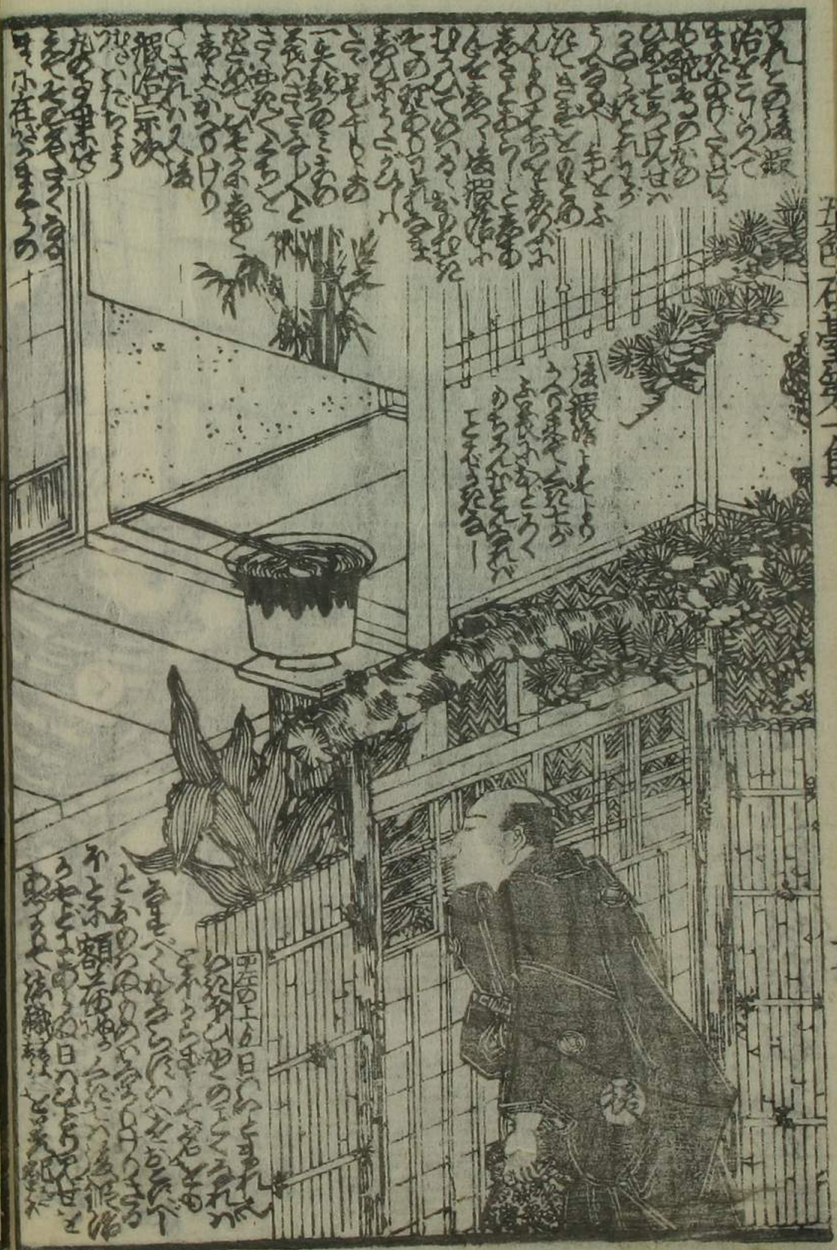


兒雷也豪傑譚　三十七編　柳下亭種員作
風俗浅間嶽　十編　十一編　柳水亭種清作
　十二編　一勇齋國芳画
女郎花五色石臺　八編　柳下亭種員作
　九編　一勇齋國芳画
不思議塚小說櫻　初編　柳水亭種清作
　三二編　一勇齋國芳画



後

遅



馬琴作
豊國画
路霜代稿
淨書谷金川

忠臣貞婦 伊呂波文庫 五編 六編 七編 柳煙亭種久作 一勇齋國芳畫

黄金水大盡盞 十一編 十二編 十三編 爲永春水作 一勇齋國芳画

假名反古 一休さうし 十三編 十四編 十五編 柳下亭種員作 一勇齋國芳画

地本錦繪 茅紙問屋 甘泉堂 芝神明前 和泉屋市兵衛

馬琴作
女郎蜂
五色
臺
壹集三

全四冊

甘泉堂板

女郎花五色石臺初編
曲亭馬琴作
一陽齋豊國画
下帙上
弘化四
丁未
春
下帙下

乎民南
倍之
五色
石臺
寺ノ集四
豊國画
甘泉堂梓

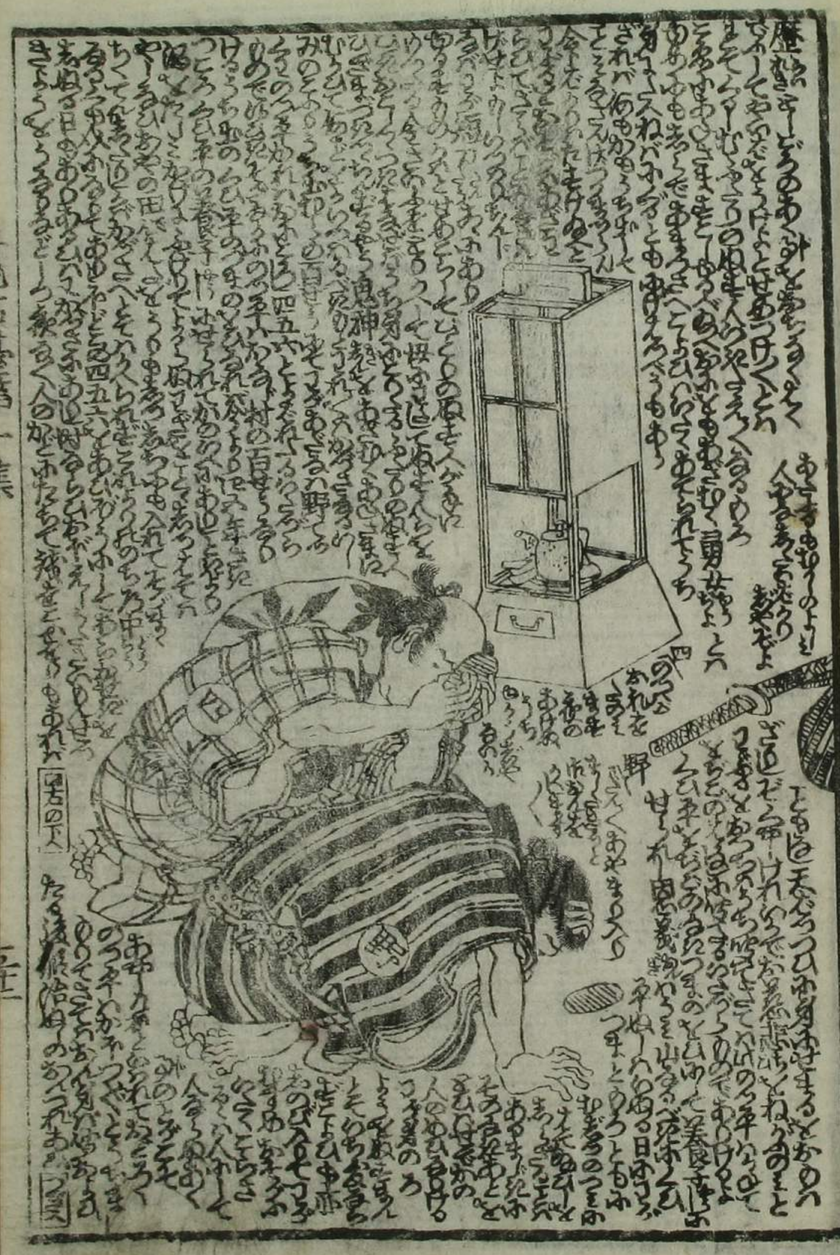
万延辛酉新板目録

兒雷也豪傑譚　三十七編　三十八編　三十九編　柳下亭種員作　勇齋國芳画

風俗浅間嶽　十編　十一編　十二編　柳水亭種清作　勇齋國芳画

女郎花五色石臺　八編　九編　柳下亭種員作　勇齋國芳画

不思議塚小説櫻　初編　二編　三編　柳水亭種清作　勇齋國芳画



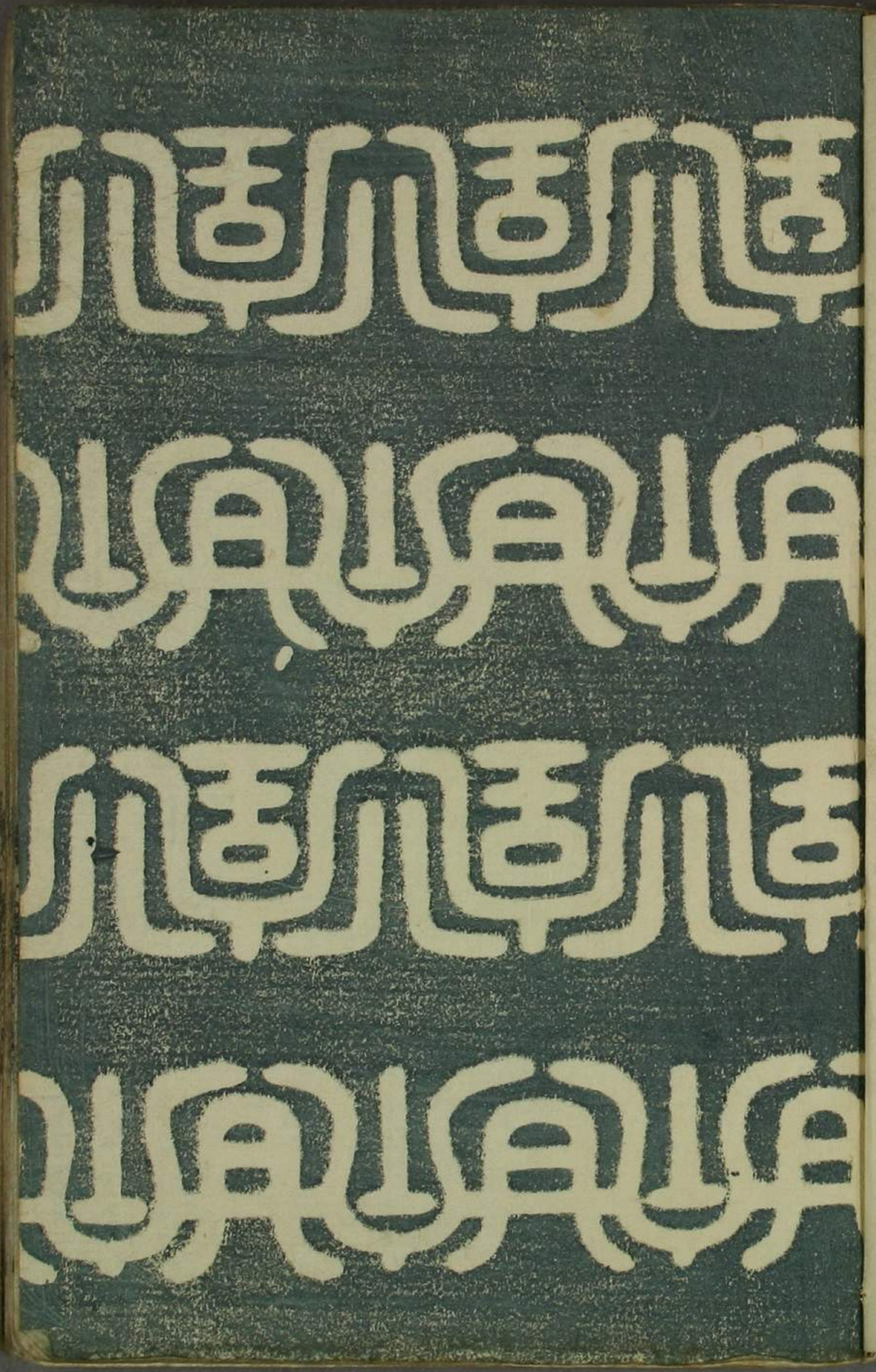
馬琴作
豊國画

忠臣貞婦 伊呂波文庫 五編 六編 七編 柳燈亭種久作 一勇齋國芳畫

黄金水大盡盞 十一編 十二編 十三編 為永春水作 一勇齋國芳畫

假名反古 一休さうし 十三編 十四編 十五編 柳下亭種員作 一勇齋國芳畫

地本錦繪 芳紙問屋 甘泉堂 芝神明前 和泉屋市兵衛



女郎花
五色
石壺

初集下

曲亭作

一陽齋画

世泉堂板